

ローソクに火を灯す

辻 信一

Written by
Shinichi Tsuji

時々、南伊豆の山あい山本剛さんを訪ねる。いつの季節でも彼は自分が焼いた竹炭で火を焚いてくれる。そしてぼくたちはその火を見つめながら、話をする。放置された竹林が急速にひろがって、生態系のバランスを崩しているのを見て、竹の産業を復活させるための事業に乗り出した。そのひとつが竹の炭焼きで、それがいつの間にか、彼の主要な仕事となった。

山本さんによれば、現代文明のおかしさの根っことして、人々が火との接点を失ったことがある。言うまでもなく、人は火をもつことによって人となり、以来、何万年という年月を人は火のそばで過ごしてきた。その火から遠ざかった時、人間に何が起こったのか。

焚き火どころか、マッチさえ擦れない子どもが多い。親たちが火の恐さを教え込んで、子どもたちを火から遠ざけてきたからだ。山本さんも言うように、それは大人たちが水の恐さを教え込んで、子どもたちを水辺から遠ざけてきたこと、重なる。その一方で、川という川に三面張りを施し、ダムを建設し、海辺という海辺にコンクリートを敷きつめてきた。土もそうだ。体や服に泥をつけて帰ってくる子どもを親は叱る。都会では、土がもう太陽に触れることがないほどに、コンクリートやアスファルトで覆いつくした。

若者たちを連れて、北米や南米を訪ねる機会が多い。旅の中で彼らが何より喜ぶのは、キャンプファイアーの時間だ。同じオレンジ色の炎に頬を輝かせながら、夜のふけるのも忘れて語り合い、歌い、踊る。心の鎧を外して、共に笑い、共に泣く。そんな時、ぼくは思うのだ。焚き火をするためにこうしてわざわざ海を渡ってきたのだな、と。そして、ぼくたちの社会は、これだけのささやかな喜びを子どもたちに与える力さえ失っていることを思う。

目の前から消えたぼくたちの火は、どこへ行ってしまったのか。火を囲む文化を失った社会は、同時に、膨

大な年月をかけて蓄積された太陽エネルギーをたかだか一世紀の内に使い尽くし、「生命の惑星」としての地球の微妙なバランスを狂わす社会でもある。発電所の火は、絶えざる開発と経済成長のために更に激しく燃え続けなければならないというのだ。

数年前ぼくは仲間たちと夏至の夜に、ささやかな自主停電を始めた。そこには、大量生産・大量消費・大量廃棄の社会への異義申し立てとともに、そういう社会を支えてきた自分たちの暮らしのスタイルに対する自省の意味が込められていた。その後、自主停電は「100万人のキャンドルナイト」としてその輪を広げ、昨年の夏至には 500万人が参加したとも言われる。

電気を消してローソクに火を灯す。それだけの小さな行為が、今多くの人々の心をワクワクさせている。こうしてぼくたちの前に戻ってきた炎は、これまでぼくたちが突き進んできた道筋を照らし出しているように見える。そしてそれは、新しい社会や、暮らしのあり方に向けてのかかり火のようでもある。

炭窯に火を入れる
山本さん



CEL

辻 信一(つじ・しんいち)

環境＝文化NGO「ナマケモノ倶楽部」世話人。1952年東京生まれ。さまざまな職業、16年間の海外生活を経て、現在、明治学院大学国際学部教授。専攻は文化人類学。環境運動に奔走しつつも、スローな、ナマケモノ的な生活を目下実践中(?)。著書は、『ピースローソク』(ゆづり堂)、『スロー・イズ・ビューティフルー遅さとしての文化』(平凡社)、『スローライフ100のキーワード』(弘文堂)など。